

日蓮大聖人御書全集

じょうにんしょう

常忍抄

新版

1334

ς

1337

じょうにんしょう

常忍抄

こうあんがんねん

弘安元年(’78)

10月1日

57歳

ときじょうにん

富木常忍

おんふみ
はいけんつかまつ そうちら
御文ほぼ拝見仕り候い了わんぬ。

ごじょう
い
御状に云わく、常忍云わく「記の九に云わく『權を稟けて界を出づるを、名づけて虚出と為す』と」云々。了性房
い
云わく「全くもつてその釈無し」云々。

き
記の九へ寿量品の処に云わく「無有虚出より昔虛為
じつこ
いた
な
こしゅつ
な
さんじょう
みなさんかい
い
実故に至るまでは、為の字は去声なり。權を稟けて界を出
づるを、名づけて虚出と為す。三乗は皆三界を出でざること

となし。人天は三途を出でんがためならざることなし。ならびに名づけて虚と為す」云々。文句の九に云わく「虚出にしてしかも実に入らざる者有ることなし。故に知んぬ、昔の虚は実の為へ去声」の故なり」云々。寿量品の經に云わく「諸の善男子よ。如來は諸の衆生の小法を樂える徳薄・垢重の者を見て乃至諸の衆生は、もつて乃至いまだかつてしばらくも廢せず」云々。この經の文を承けて、天台・妙樂は釈せしなり。

この經文は、初成道の華嚴の別円より乃至法華經の

しゃくもんじゅうしほん

しょうぼう

い

とくはく

迹門十四品を、あるいは「小法」と云い、あるいは「徳薄・

くじゅう

こしゅつ

とう
と

きょうもん

垢重」、あるいは「虚出」等と説ける経文なり。もししか

けごんぎょう

けごんじゅう

じんみつきよう

ほつそうじゅう

はんにやきよう

らば、華厳經の華嚴宗、

だいにちきよう

しんごんじゅう

かんぎよう

じょううどじゅう

りょううがきよう

深密經の法相宗、般若經の

きょう

きょう

どくじゅ

三論宗、大日經の真言宗、觀經の淨土宗、楞伽經の

ぜんしゅうとう

しょきょう

しょしゅう

えきよう

禪宗等の諸經の諸宗は、依經のごとくその経を読誦す

さんがい

い

さんず

い

もの

とも、三界を出でず、三途を出でざる者なり。いかにいわ

かれ

じつ
しょう

すぐ

とううんぬん

んや、あるいは彼を実と称し、あるいは勝る等云々。この

ひとびと

てん
む

つばき
は

ち
つか

いか

もの

人々、天に向かつて唾を吐き、地を齧んで忿りをなす者か。

ほうもん

によらい

めつご

がつ
せいせんごひやくよねん

この法門において、如來の滅後、月氏一千五百余年、

付法藏の一十四人、竜樹・天親等、知つていまだこれを顯さず。漢土一千余年の余人も、いまだこれを知らず。ただ天台・妙樂等のみ、ほぼこれを演ぶ。しかりといえども、いまだその実義を顯さざるか。伝教大師、もつてかくのごとし。今、日蓮、ほぼこれを勘うるに、法華経のこの文を、重ねて涅槃経に演べて云わく「もし三法において異の想を修せば、当に知るべし、この輩は、清淨の三帰に則ち依処無く、あらゆる禁戒をば皆具足せず、終に声聞・縁覺・菩提の果を証すること能わず」等云々。この経文は正し

ほけきょう

じゅりょうほん

けんぜつ

じゅりょうほん

き

たと

に

く法華經の寿量品を顕説せるなり。寿量品は木に譬え、爾

ぜん しゃくもん

かげ たと

もん

きょうもん

前・迹門をば影に譬うるの文なり。經文にまた、これ有り。

ごじはつきよう とうぶんかせつ だいしよう やく かげ

うんぬん

ほんもん

ほうもん

とううんぬん

五時八教・當分跨節・大小の益は影のごとし、本門の法門

き かげ うんぬん

じゅりょうほん いぜん

ぎいせ

やく あんちゅう

は木のごとし云々。また、寿量品已前の在世の益は闇中の
木の影なり、過去に寿量品を聞きし者のことなり等云々。

ふしん かこ ほうぼう

じゅりょうほん き

もの

とううんぬん

また、「不信は謗法にあらず」と申すこと、また云わく
「不信の者、地獄に墮ちず」云々。

ご まき い うたが しよう うんぬん

じん

すなわ

まさ

五の巻に云わく「疑いを生じて信ぜずんば、則ち當に

あくどう お うんぬん

悪道に墮つべし」云々。

そう

おんこころ 得 そうら

ほけきょう

にぜん

ひ

む

総じて御心え候え。法華經と爾前と引き向かえて

ほけきょう にぜん ひ む

とうぶんかせつ さんよう あ にちれん

勝劣・浅深を判ずるに、当分跨節のことに三様有り。

ほうもん せいじん はん

ほうもん だいきん ほうもん

ほうもん だいさん もう

せけん

ゆめ いち に

ほうもん だいさん ほうもん

ほんたい いち

こう

が法門は第三の法門なり。世間にほぼ夢のごとく一・二を

ほうもん だいさん もう

ほうもん だいさん ほうもん

ほうもん だいさん ほうもん

てんだい に

ば申せども、第三をば申さず候。第三の法門は、天台・

ほうもん だいさん そうちゅう

ほうもん だいさん ほうもん

ほうもん だいさん ほうもん

てんだい に

妙樂・伝教も、ほぼこれを示せども、いまだ事了えず。詮

まつぱう いま ゆづ あた

ご ごひやくさい

こと お

せん

ずるところ、末法の今に譲り与えしなり。五の五百歳はこれなり。

ほうもん ごろんだん よ うけたまわ

ご ごひやくさい

こと お

せん

ただし、この法門の御論談は余は承らず候。彼は広

まつぱう いま ゆづ あた

ご ごひやくさい

こと お

せん

学多聞の者なり。「はばかり、はばかり。みた、みた」と候

ほうもん ごろんだん よ うけたまわ

ご ごひやくさい

こと お

せん

がくたもん もの

憚

見

こう

いしかば、この方のまけなんども申しつけられなば、いか
んがし候べき。ただし、彼の法師等が、彼の釈を知り候
わぬはさておき候いぬ、「六十巻になし」など申すは、天
のせめなり。謗法の科の法華経の御使いに値つて顯れ候
なり。

また、この沙汰のことも、定めてゆえありて出来せり。
かじまの大田次郎兵衛・大進房、また、本院主もいかにと
や申すぞ、よくよくきかせ給い候え。

これらは経文に子細あることなり。法華経の行者をば、

第六天の魔王の必ず障うべきにて候。十境の中の魔境
これなり。魔の習いは、善を障えて悪を造らしむるをば悦
ぶことに候。強いて悪を造らざる者をば、力及ばずして
善を造らしむ。また、二乗の行をなすものをば、あながち
に怨をなして善をすすむるなり。また、菩薩の行をなすも
のをば、遮つて二乗の行をすすむ。最後に純円の行を
一向になす者をば、兼別等に堕とすなり。止觀の八等を御
らんあるべし。

また、彼が云わく「止觀の行者は持戒」等云々。
かれ
い
しかん
ぎょうじや
じかい
とううんぬん

もんぐ

く

はつ

に

さん

ぎょうじや

じかい

制

きょうもん

ふんみょう

しがん そうい

みょうらく もんどう

文句の九には初・二・三の行者の持戒をばこれをせいす。

経文、また分明なり。止觀に相違のことは妙樂の問答これ有り。記の九を見るべし。初隨喜に二つ有り。利根の行者

じかい

か

どんこん じかい

みょうぞう

は持戒を兼ねたり。鈍根は持戒これを誓止す。また、正像

まつ ふどう

しょうじゆ

しゃくぶく こと

でんぎょうだいし

末の不同もあり。摄入・折伏の異なりあり。伝教大師の

いち とら

おも あ

市の虎のこと、思い合わすべし。

のち

しもうさ

ごほうもんそうろう

りょうしょう

これより後は、下總にては御法門候べからず。了性・

しねん 詰

うえ

た

ひと ごろんそうちら

返

淺

思念をつめつる上は、他の人と御論候わばかえりてあざく

か りょうしよう

しねん

おも

といごろ

にちれん

謗

なりなん。彼の了性と思念とは、年来、日蓮をそしると

受けたまわる。彼ら程の蚊虻の者が、日蓮程の師子王を聞か
ず見ずして、うわのそらにそしる程のおこじんなり。天台
法華宗の者ならば、私は南無妙法蓮華経と唱えて念佛なん
ど申す者をば「あれは、さること」など申すだにもきかい
なるべきに、その義なき上、たまたま申す人をそしるじよう、
あらふしげ、あらふしげ。

だいしんぼう

前

書

遣

そういう

強

々

書

あ

もう

たま

そうちら

だいしんぼう

じゅうらせつ

大進房がこと、さきざきかきつかわして候 ように、
つよづよとかき上げ、申させ給い候え。大進房には十羅刹

付

たま

ひ

返

たも

そういう

のつかせ給いて、引きかえしせさせ給うとおぼえ 候ぞ。

まおう ししゃ

付

そうちら

また、魔王の使者なんどがつきて候 いけるが、はなれて
そうちら そうちら あつきにゅうごしん そうちら 虚
そうちら そうちら そうちら そうちら 離
そうちら 候とおぼえ候ぞ。「悪鬼入其身」は、よもそら事にて
は候わじ。

ことりとおも そうちら つか 急 そうちら 夜 書
事々重く候えども、この使いいそぎ候えば、よるかき

そうちら じゅうがつづいたち きょうきょうきんげん
て候ぞ。恐々謹言。

にちれん かおう
日蓮 花押

十月一日